

令和元年5月28日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K15861

研究課題名（和文）次世代型ケアを創出できる臨床看護師のリーサーチマインドを育む教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of an education program that fosters research-oriented thinking in clinical nurses

研究代表者

佐藤 富美子（Sato, Fumiko）

東北大学・医学系研究科・教授

研究者番号：40297388

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：看護師が臨床研究を行うために必要な教育ニーズを質問紙調査によって明らかにし、次世代型ケアを創出できる臨床看護師のリーサーチマインドを育む教育プログラムを開発した。教育プログラムは、「基礎知識を得る」「看護実践を省察する」「先達から学ぶ」「研究論文を読む」「研究実践者につながる」「看護研究力を磨く」の6要素から成る。2年の教育期間とし、2018年8月から2023年3月まで2クール計画で開始した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1990年代中頃から急速に看護系大学が増加し、看護科学の体系化は次世代の優秀なリーダー養成の責任を担う大学でも希求の課題である。それには教員が臨床看護師として働く若い世代から臨床で研究と実践を統合する、看護研究の成果を活用し評価するなどのリーサーチマインドをもつ環境が必要であり、それが新たなキャリアパスを切り拓き、新しいケアの創出への貢献ができる次世代の人材育成へとつながる。

研究成果の概要（英文）：Questionnaire surveys clarified the educational needs necessary for nurses to conduct clinical research, and developed an educational program that fosters a research-oriented thinking in clinical nurses who can create next-generation care. The education program consists of six elements: "Get basic knowledge", "Reflect on nursing practice", "Learn from the other side", "Read research papers", "Connect with research practitioners" and "Hearing nursing research ability". The education period is 2 years, and it started with a two-session plan from August 2018 to March 2023.

研究分野：がん看護学

キーワード：看護教育学 臨床看護師 リサーチマインド 教育プログラム

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

少子高齢化の進展や医療技術の高度化などにより、看護職の需要は増大し、全国的に看護職の量的な確保が求められていると同時に、質の高い看護職の育成ならびに質の高い看護実践を基礎づける看護科学の体系化が希求の課題になっている。そのため本大学および大学病院看護部では、2014年に「東北大学ケアサイエンス共創センター」を設置し、次世代型ケアの創出をめざした活動を開始した。このような活動と看護科学の体系化には、日々の実践を研究的に検証・蓄積し、あるいは既にあるエビデンスを実践に活用していくリサーチマインドの育成が必須である。

臨床看護研究に関する文献レビューによると、約65～90%の看護師が看護研究の必要性や意義を認識しながら、主体的に看護研究に取り組む看護師が少なく、過去29年間において大きな変化がないと報告されている(宇多絵、2012)。看護師による看護研究の実施を妨げる要因は、研究時間が業務時間内に保証されていないという時間的問題、研究能力の不足、研究の遂行に必要な支援体制の不足などが報告されている(遠藤ら、2001;平松ら、2005)。それらの阻害要因を理解し、看護師のリサーチマインドを育む教育プログラムの開発が求められる。

日本国内外の先行研究で、看護師のリサーチマインドすなわち研究指向性を育む内容に関する論文はみいだせなかった。医療関連職種としてMD - PhDコース、医学生に対する研究者養成のための教育カリキュラムの検証に関する文献(長岡、2012; Burgoyne et al. 2010; Imafuku et al., 2015)や、研究指向性、自ら学ぶ力といったキーワードによって教育手法に関する文献(中室、2015)があったが、今回の研究目的に沿う適切な先行研究は極めて少ないことがわかった。これらの現状に鑑み、臨床の看護師が取り組む研究の意義や方法を検討し、次世代型ケアを創出できる臨床看護師のリサーチマインドを育む教育プログラムの開発とその有効性の検証が重要である。

### 2. 研究の目的

- (1) 大学病院に勤務する看護師の臨床看護研究に対する取り組みの実態を質問紙調査によって明らかにする。
- (2) (1)の結果をもとに臨床看護師と大学教員と協働で「次世代型ケアを創出できる臨床看護師のリサーチマインドを育む教育プログラム」を作成し、その有効性を検証する調査を開始する。

### 3. 研究の方法

- (1) 大学病院に勤務する看護師の臨床看護研究に対する取り組みの実態に関する質問紙調査  
対象施設は、本調査のデータを基礎資料として教育プログラムの開発と有効性の検証を予定しているA大学病院とした。対象の適格基準はA大学病院の常勤および非常勤の看護師および助産師で、本調査概要を書面で理解し、調査協力に同意した者とした。定年退職後の再雇用者、調査時に産前産後休暇・育児休暇・病気休暇・介護休暇の各制度利用者は除外した。本研究は東北大学大学院医学系研究科倫理委員会の承認を得て、2016年7月25日～8月31日に実施した(受付番号:2016-1-206)。

調査方法は無記名の自記式・構成型質問紙による1か月の留め置き調査である。依頼書の内容を理解し、調査協力に同意した対象者は質問紙の回答を無記名で行い、記載済みの質問紙を封筒に入れて密封し、各部署に設置した回収袋に提出した。回収袋は、質問紙配布から1か月後に回収した。質問紙は対象の基本属性、臨床看護研究の取り組み、看護研究を行うために組織に求める支援で構成した。質問項目は先行研究および看護師の教育経験がある看護管理者・看護系大学教員計5名の討議によって作成した。調査前に対象10名に対し、作成した質問紙の説明文および質問文の読みやすさ、単語の解釈のしやすさ、質問紙への記入のしやすさについてプレテストを実施した。プレテストの結果、単語の解釈について質問があった1項目を修正した。

臨床看護研究の取り組みのうち、「看護研究経験の有無」、「継続・発展させて取り組んでいる研究テーマの有無」、「学会誌などで公表されている看護研究成果の臨床看護への活用状況(非常に・時々=1、あまり・全く=0)」の3項目の特性をみるために、看護専門資格の有無、臨床経験年数(5年未満・5年以上)、看護基礎教育課程(大学・大学以外)、看護基礎教育課程における看護研究成果公表の有無、修士課程修了の有無、博士課程修了の有無、所属学会の有無の7変数との関連をFisherの直接法を用いて解析した。

- (2) 『次世代型ケアを創出できる臨床看護師のリサーチマインドを育む教育プログラム』の開発と有効性を検証する調査

教育プログラムの概要は 看護研究を継続して行い、臨床看護師に看護研究に関するアドバイスができる看護研究支援者育成を目指す教育プログラムである。教育プログラム受講者は、TNADS(Tohoku university hospital Nursing Ability Development System: 東北大学病院看護実践能力育成開発システム)レベル 以上の取得者とする。初年度は9名のモデルケースで開始する。受講者は本人の参加意思と看護師長の推薦を必要とする。大学教員と臨床看護師の強みを互いに出し合い、プログラムを運営する。

教育プログラムは6つの要素で構築した。

- 1.基礎知識を得る: 文献検索、研究計画書の作成、研究方法、統計、看護研究倫理などについて学ぶ 企画: 看護研究お悩み解決! 看護研究計画のプロセスを学ぼう!(5回)、事例で学ぶ研究方法 (2回)、医療統計勉強会
  2. 看護実践を省察する: 看護実践を研究的視点で省察できる方法について学ぶ 企画: 困難事例についてカンファレンスをロールプレイする
  3. 先達から学ぶ: 経験豊かな看護研究経験者が「先達」として研究力を高めるための応援をする 企画: 研究のプロセスに関するワークショップ、修士をもつ看護師と研究について討議する
  4. 研究論文を読む: 質の高い研究論文を選択し、論文をクリテックする能力を養う 企画: 大学院の公開ゼミに参加する、学会などで得た知見を院内看護研究会や看護の質向上委員会で報告する
  5. 研究実践者をつながる: 研究者間のネットワークを育み、開拓できる方法について考える 企画: 学会・研究会・勉強会に参加する、大学・他部署と共同で研究を行なう
  6. 看護研究力を磨く: 研究テーマの選定から公表までのプロセスを通して研究力を養う 企画: 1グループ3名がファシリテーターの指導を受けながらグループ研究を行なう。看護研究計画書検討会にオブザーバーとして参加する、事例計画書作成のアドバイスを行う
- 教育プログラムの運用スケジュールは、1クールの研修期間を2年とする。1クール目 2018年8月～2020年7月、2クール目 2021年4月～2023年3月に運用する。

プログラムの有効性を検証する調査の対象は、東北大学院看護実践能力開発システムレベル以上の取得者で、教育プログラム参加を希望する看護師または助産師、所属看護師長の推薦があり、参加許可が得られた看護師または助産師とする。研究デザインは 対照群を置かない一群の前後比較による介入研究で、東北大学大学院医学系研究科倫理委員会の承認を得て、2018年8月に開始し、2023年9月に終了予定である(受付番号:2018-1-293)。

主要評価は継続した研究テーマを持つ者の増加、副次評価は看護実践やカンファレンスにおける先行研究の活用状況が増加、受講生から受けたアドバイスによって、入職3年目看護師の事例研究計画書が「修正なく研究開始」「修正後に研究開始」者が増加し、「再提出または個人面接」者が減少 (2017年度「修正なく研究開始」0、「修正後に研究開始」54.8%、「再提出」6.5%、または「個人面接」38.7%)、学会発表数・論文数の増加、学会入会者数の増加、大学院への進学を考え始める者の増加、看護研究に取り組む態度が肯定的になるとした。

調査方法は、無記名による自記式質問紙調査である。受講前はオリエンテーション時に回答し、その場で回収する。中間評価は研修前に質問紙を配付し、終了時に回収する。受講後は対象施設所属の調査者が、各所属看護師長に質問紙が入った封筒を配布する。各所属看護師長が対象に質問紙が入った封筒を配布する。回答済みの質問紙を封筒に入れて密封し、学内便で調査者に提出する。回収期間は、質問紙配布から2週間以内とする。調査時期は1クールが受講前2018年8月、受講6か月後2021年1月、2クールが受講前2021年4月、受講6か月後2023年9月であり、中間評価は各研修後に実施する。

#### 4. 研究成果

(1) 大学病院に勤務する看護師の臨床看護研究に対する取り組みの実態に関する質問紙調査  
適格基準を満たす1,139名に質問紙を配布し、929名(回収率81.6%)から回答があり、最終的に質問項目の欠損がない908名(最終回収率79.7%)を分析対象とした。

副看護師長以上の管理職は15.4%、看護資格は看護師が93.7%、看護専門資格は認定看護師3.7%、専門看護師1.8%、学会認定資格を6.4%が有し、臨床経験年数5年以上が64.7%であった。看護基礎教育課程は大学49.0%、短期大学22.5%、専門学校または各種学校27.3%であった。看護基礎教育課程における看護研究履修者は81.7%で、そのうち看護研究を計画立案した者が70.8%、計画立案した者で計画を基に実施した者が90%、さらにその成果を公表した者は62.6%で、本調査対象908名の39.9%を占めた。修士課程修了者は8.9%、博士課程修了者は0.6%、32.9%が学会に所属し、平均所属学会数が1.58(SD1.0)、所属学会の専門分野は看護学系が77.4%、次いで臨床医学系31.5%であった。

臨床看護研究の取り組みは、看護基礎教育課程卒業以降に看護研究経験「あり」が73.7%で、実施に至ったきっかけは「院内教育プログラムに事例研究が組み込まれていた」65.0%が最も多く、次いで「共同研究の誘いがあった」36.2%、「自分の興味・関心から実施した」24.4%であった。継続・発展させて取り組んでいる研究テーマ「あり」が11.9%で、継続・発展しない理由は「発展させる研究課題が見いだせなかった」29.7%、「専門分野を変更した(病棟の異動など)」24.7%、「研究方法を発展させる方法が分らなかった」18.4%であった。

リサーチマインドを育むためには必要なことは「日々の看護を振り返る機会をもつ」76.9%、「問題意識をもって看護に取り組む」70.4%、「看護研究の発表を聞く機会をもつ」41.4%、リサーチマインドを育むために実施してきたことは「学会に参加する」47.8%、「研究会や研修会に参加する」45.8%、「カンファレンスで発言する」43.9%の順に多かった。

看護研究に関する研修・学会等の参加「あり」が73.7%で、参加ありの34.2%が看護研究に活用していると回答した。学会誌などに公表されている看護研究成果を臨床看護に活用しているかについては「非常に」「時々」と合わせて27.3%であった。

看護研究を行うために組織に求める教育内容は、看護研究プロセスの「データ分析・考察」63.4%、「文献検討」56.4%、「研究テーマの決定」49.8%の順に多かった。組織に求める環境お

よび体制は、選択肢から最大3項目を選択するように求め、その求めに準じて回答した817名について集計した。上位3項目は「院外研修・学会等に参加しやすい環境整備(勤務調整・参加費用の補助など)」57.9%、「研究できる環境整備(勤務内の研究活動など)」51.5%、「看護研究に関する相談・指導の窓口の明確化」36.8%であった。

「看護研究経験あり」の割合が未経験者と比べて有意に多かった対象の基本属性は、「看護専門資格あり」( $p<.001$ )、「臨床経験5年以上」( $p<.001$ )、「看護基礎教育課程大学以外」( $p<.001$ )、「所属学会属あり」( $p<.001$ )であった。「継続・発展させて取り組んでいる研究テーマあり」の割合がない者と比べて有意に多かった対象の基本属性は、「看護専門資格あり」( $p<.001$ )、「臨床経験5年以上」( $p<.001$ )、「修士課程修了あり」( $p<.001$ )、「所属学会属あり」( $p<.001$ )であった。「学会誌などで公表されている看護研究成果の臨床看護への活用あり」が活用なしと比べて有意に多かった対象の基本属性は、「看護専門資格あり」( $p<.001$ )、「臨床経験5年未満」( $p<.001$ )、「看護基礎教育課程大学以外」( $p=.023$ )、「修士課程修了あり」( $p=.012$ )、「所属学会属あり」( $p<.001$ )であった。

本研究により、大学病院に勤務する看護師が看護研究を行うための教育ニーズは、日々の看護実践を丁寧に積み重ね、研究課題を見だし、研究成果を活用し、研究を継続させていくプロセスにあった。看護師個々のリサーチマインド育成に関する認識および実践の動機づけを支え、組織の人材資源を活用した教育の必要性が示唆された。

(2) 『次世代型ケアを創出できる臨床看護師のリサーチマインドを育む教育プログラム』の開発と有効性を検証する調査

1クールの事前調査以降の教育プログラムの成果に関する調査は、1クール受講6か月後2021年1月であり、本調査を継続する。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 5 件)

佐藤富美子、東北大学看護師のリサーチマインドを育む、第5回東北大学ケアサイエンス共創センター事業TUCSCO講演会、2018.

神裕子・佐藤富美子・酒井敬子・山内泰子・片倉睦、看護師が臨床研究を行うための教育・環境ニーズに関する質的分析、第38回日本看護科学学会学術集会、2018.

佐藤富美子・酒井敬子・神裕子・片倉睦・山内泰子、臨床看護師のリサーチマインドを育む教育プログラムの作成、日本看護学教育学会第28回学術集会、2018.

佐藤富美子・酒井敬子・神裕子・片倉睦・山内泰子、次世代型ケアを創出できる臨床看護師のリサーチマインドを育む教育プログラムの開発、第37回日本看護科学学会学術集会、2017.

佐藤富美子・酒井敬子・神裕子・片倉睦・山内泰子、看護師が看護研究を行うための教育・環境ニーズに関する調査、日本看護学教育学会第27回学術集会、2017.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：丸山 良子

ローマ字氏名：Maruyama Ryouko

所属研究機関名：東北大学

部局名：医学系研究科

職名：教授

研究者番号(8桁)：10275498

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：酒井 敬子

ローマ字氏名：Sakai keiko

研究協力者氏名：神 裕子

ローマ字氏名：Jin Yuko

研究協力者氏名：片倉 睦

ローマ字氏名：Katakura Mutsumi

研究協力者氏名：山内 泰子

ローマ字氏名：Yamauchi Yasuko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。